

人物呼称の中に入った数表現に関する考察

—— 天草版『平家物語』の「三郎」「四郎」などを中心にして ——

近藤政美

I. はじめに

先稿「中世日本語の数詞の構造と用法に関する考察—— 天草版『平家物語』を中心にして ——^(注1)」において、学校文法における数詞を取り上げて日本語の中世の数表現を考察した。この時に明確にしたことを簡約して述べると、次のようになる。

中世日本語の数詞を天草版『平家物語』^(注2)を主たる資料にして検討した結果、正確な数表現と大体の（曖昧な）数表現が存することを発見した。特に、後者の表現は「もも」「七つ八つ」「十日ごろ」「十二三」「万事」「三百余騎」「五百余り」など、多種にわたり語彙が豊富であった。

視点を変えて和語・漢語・混成語という方面から考えると、正確な数表現は全体的には「八十」「第二十五」「一匹」「十三夜」など、多く漢語を用いている。和語を用いているのは「とを」「一言葉（ひとことば）」「三刀（みかたな）」など、わずかである。

曖昧な数表現と学校文法による品詞分類との関係を考察してみたところ、従来見落としがちであった曖昧な数表現の一群を発見することができた。「ばかり」「ほど」などは、学校文法では助詞として分類していたために、「三つばかり」「五百艘ほど」などは、語彙索引などではとかく「三つ」「五百艘」として正確な数表現の中に入れてしまいがちであった。が、これらは助詞をも含めた文節を単位として、曖昧な数表現に入れるべきことを新たに認識した。これは『天草版平家物語語彙用例総索引』^(注3)の作成を経てこの論文に取りかかった成果である。

〔基本数詞〕と〔基本数詞＋助数詞〕との用例の比較により、基本数詞の中には多く助数詞の意味を含む用法が存することを発見した。例えば、「十五」は十五歳の意味、「三千余り」は「三千余騎」とほぼ同じ意味で使用されている。また、〔基本数詞＋名詞〕と、〔基本数詞＋助数詞〕との間には、明確な区別を付けることのできない場合がある。「三刀（みかたな）」は前者、「一振り」は後者と判別したものの、問題が残る数表現も存する。

また学校文法においては数詞の中に入らない次のような数表現が存する。

(a) きわめて強いことを数の差によって示す表現

三井寺において隠れもない筒井の浄妙坊といふ一騎当千の兵ぢやぞ： (126②)

(b) 固有名詞に入った数の表現

i 伊勢の三郎汝は砺波山の軍いくさ からに辛い命を生きて、乞食こっじきの身となつて、京へ上ったはなんぞと申す。 (333②)

ii (木曾殿) 六条河原へうち出たれば、東国の武士とおぼしうて三十騎ばかり来る： (239④)

前者(人名の「三郎」)は、3番目に生まれた男子、三男のことである。後世、主として三男の名として付けた。

後者(地名の「六条」)は、京都六条通りの東端、鴨川に臨んだ所のことである。

(c) 副詞に入った数の表現

一門の衆は一向これを受け付けられなんだ。 (226②)

本稿は上記の天草版『平家物語』の数の表現の用例のうちの(b) i の、人名の中に入った「三郎」のような語の構造と用法について、『平家物語』^(注4)〈高野本〉や『吾妻鏡』^(注5)「武家伝」^(注6)などと比較しながら考察したい。

II. 固有名詞としての「三郎」「四郎」など

「郎(ろう)」という語の意味・用法について、『日本国語大辞典』^(注7)では次のように説明している。

㊦ 【名】①男子。特に、年若い男子。*日本一鑑窮河話海(1565-66頃)「郎、…」*俳諧・本朝文選(1706)六・誄類、去来誄(許六)「此郎は向井氏玄勝老人の末の子に生まれて」…②女性から夫、または情夫をさしている語。…③中国の官の名。侍郎、員外郎、尚書郎などの総称。李陵(1943)〈中島敦〉「彼は吉報の使者として嘉(よみ)せられ、郎となってそのまま都に留まってるた」…

㊧ 【接尾】①一族あるいは一家の中での男子に生まれた順序に従い、数字あるいはそれに準ずる語に付いて、その男子の名を作る。「太郎」「次郎」「三郎」。*伊勢物語(10C前)六「御せうと堀川の大臣、たらう国経の大納言」…②数字、また、それに準ずる語に付いて、男女の別なく子どもの生まれた順を表すのに用いる。*読本・雨月物語(1776)蛇性の姪「男子二人、女子一人をもてり。太郎は

質朴(すなほ)にてよく生産を治む、二郎の女子は大和の人のつまどひに迎られて彼所(かしこ)にゆく、三郎の豊雄なるものあり」

現在の学校文法から品詞分類すれば、㊦は名詞(普通名詞)である。そして、㊦は名詞を作る接尾語で、男子に関して用いられる①が一般的である。

㊦①の基本数詞(意味上は順序を示す)に「郎」の付いた「三郎」「四郎」などの語は、天草版『平家物語』では余り多く用いられていない。『天草版平家物語語彙用例総索引』で調査してみると、4語5例である。

a 三郎(さぶらう)〈人名〉 Saburō 〈天草版〉

判官は手を負はれたれども、三郎を取って押へて首を搔き切って…(132⑱)

○参考 この前に「上総の守がうちの三郎丸といふ者」(132⑯)とある。「三郎」はこれと同じ人物。

b 四郎(しらう)〈人名〉 Xirō 〈天草版〉

備中の住人真名辺の四郎, …, 四郎は生田の森にゐたが, (269⑩)

c 五郎(ごらう)〈人名〉 Gorō 〈天草版〉

備中の住人真名辺の四郎, 五郎というて, 強弓の精兵兄弟あつたが, 五郎は一の谷に置かれ, (269⑨)

d 七郎(しちらう)〈人名〉 Xichirō 〈天草版〉

弟茅野の七郎(250⑤) …, 弟の七郎が見る前で, 彼らに語らせうずるためちやと言うて, (250⑨)

「三郎」「四郎」などの語を、一族あるいは一家の中で「三番目に生まれた男」「四番目に生まれた男」などの意味で捉える時、学校文法では名詞(数詞)と分類することになろう。が、天草版『平家物語』ではすべて特定の人物を指している。そして、それらの人物は各語の前に姓・地名などを用いて示しているので、直前はこれらを省略しているのである。たとえば、d「七郎」(250⑨)は「茅野の七郎(250⑤)」のことである。これは数詞を人物呼称に取り入れ、固有名詞として用いていると言えよう。

Ⅲ. 固有名詞の中に取り入れた「三郎」「四郎」など

天草版『平家物語』における「三郎」「四郎」など、前節で述べたように、学校文法で用法上から一つの単語(数詞)として扱う例はない。これらはすべて固有名詞であり、姓名の姓にあたる部分が省略された表現である。第I節の用例(b) i 「伊勢の三郎」など

を加えると、姓名の名にあたるこの種の用例はかなり増加する。

- a i 伊勢の三郎^{よいち}与一が後ろへ歩ませ寄って、…と言うたれば、(337⑱) その他
(332⑰) (333②)
- ii 瀬田をば 稲毛の三郎^{はかりこと}が 謀^ぐ で 供御の瀬^ご を渡いて、(237⑭)
- iii 佐々木の三郎、梶原平次、渋谷^{しぶや} これ三人^{さんにん} は馬を捨てて、…、(236⑳) その他
(324⑫)
- iv 志田の三郎 は三百余騎^{いもあらひ} で一口を防いだと、申す。(30①)
- v 続く者は 鈴木 の三郎、亀井 の六郎、そのほか二十余騎喚いて駆くれば、(377⑥)
- vi 搦手 の大將軍 義経 に相従^{にんじゆ} ぶ人数は 大内 の太郎、安田 の三郎、武蔵坊弁慶 を先として、都合その勢一万余騎で同じ日、同じ時に都を立て、(254⑭) その他
(154①)
- vii ここに 緒方 の三郎^{るせい} は 威勢 の者であるによって、義経 に頼まれよとあれば、(379①)
- b i その後 佐々木 の四郎^{のち} が参って、…由を申すところで、(230①) その他 (230②) (232⑬)
- ii それがしが親しい者に 人見 の四郎と申す者でござるが、それがしを尋ねて…、(274㉔)
- c さうするほどに 成田 の五郎^く も来る、土肥 の次郎^{とひ} も 七千余騎^{しちせん} で押し寄せて、関 をどっと作れば、(267⑦)
- d i 続く者は 鈴木 の三郎、亀井 の六郎、そのほか二十余騎喚いて駆くれば、(377⑦) その他 (377⑳)
- ii (木曾殿は) 楯 の六郎に七千余騎を添へて、北黒坂へ回し、(164⑭)
- e 手塚 の八郎といふ者長刀を持って寄せ合はせたに乗らうとて、(112⑥)
- f i 金子 の十郎雑言は互ひに益ない：…と申しも終はらねば：(333⑥)
- ii 三浦 の十郎きたなし殿、三浦の方では鳥一つ立っても…と言うて…、(272①)

次の g 「三郎殿」「四郎殿」は前節の a 「三郎」・b 「四郎」に準ずる用法である。「殿」〈接尾〉は人名・官職名などに付けて敬意を表わす。そして、これらの例は「佐々木」という姓が前に記されて、特定の人物を指定する固有名詞と解することができる。

g 佐々木 は 三郎殿 (232①) か？ 四郎殿 (232②) か？

h その日 大臣殿^{おほいとの} の車をやった牛飼ひはもと召し使はれた 三郎丸 といふ者ぢゃが、(350⑤) その他 (350⑫)

- i 喜。それは十郎蔵人を討たうずると言うて、河内の長野の城へ越えたが、(249①)
(『平家物語』〈斯道本〉にも「十郎蔵人」とある)

hの「三郎丸」の「丸」〈接尾〉は人名などに付けて親愛の意を表す。また姓はないが、この語の前に主人にあたる「大臣殿」が記されており、それに従属している人を指している。この人物を限定しており、固有名詞的働きだと解することができる。

またiの「十郎蔵人」は官職「蔵人」を付けて「十郎」を限定し、源行家であることを示している。

天草版『平家物語』では「三郎」「四郎」などが前節のように数詞の域を脱し、文脈上である人物に限定されたり、この節のように他の語（主として姓）と結合して、すべて特定の人物を指している。いわば、人物呼称の語となっている。

IV. 固有名詞の中の〔基本数詞+郎〕

固有名詞の中に取り入れられた「三郎」「四郎」など〔基本数詞+郎〕の構成のものとして、天草版『平家物語』では次のような語が見られる。

(), (), 三郎, 四郎, 五郎, 六郎, 七郎, 八郎, (), 十郎,
〈太郎〉 〈次郎〉 〈九郎〉

○参考 金子十郎家忠・同与一親範…、(〈高野本〉下146⑮) 与一は1 1の意味か。

「一郎」に相当する語は「太郎」と言い換えられている。

a 源氏方の佐竹の太郎が下人…、(150⑨)

また「二郎」に相当するzırōは『天草版平家物語物語語彙用例総索引』ではすべて「次郎」と翻字した。

b i 次郎申したは：口惜しいことを宣ふものかな！(268⑦)

ii 弟の次郎これを見て、敵に(兄の)首を取らすまいと思うたか、(269⑬)

iii ここに実光というて、三十人の力ある人その弟の次郎も劣らぬしたたか者、
(346⑱)

けれども『平家物語』〈高野本〉などの古写本の中には「二郎」と記されたものも少々存する。

c 久下二郎重光(〈高野本〉下146⑦)、(〈^(註8)竜大本)も同じ、下192⑳)

これらはすべて「一人目に生まれた男の子」「二人目に生まれた男の子」の意味で用いられている。

なお、「次郎」には文脈上で先述の人物を示した例もある。

d 河原太郎，河原次郎というて，兄弟あったが，…，次郎申したは，(268⑦)

『平家物語』で「九郎」が源義経の呼称として多く見られる。そして、天草版『平家物語』では「九郎」の大部分が「義経」と言い換えられている。外国人には固有名詞として理解しやすかったからであろう。

e 〈天草版〉

- i 義経330④ (判官〈斯道本〉640^(注9)⑦)
- ii 義経331① (九郎〈斯道本〉641⑧)
- iii 義経236⑩ (九郎御曹子〈斯道本〉486⑨)
- iv 義経382② (義経〈斯道本〉742⑨)

〈天草版〉ではこのように理解しやすく書こうとした。その結果として「一郎」「二郎」に相当する語として「太郎」「次郎」を用い、「九郎」を「義経」と訳すことなどをした。が、全体としては数詞として体系性を保とうと働いている。

V. 『平家物語』の用例との比較

『平家物語』諸本には「三郎」「四郎」などが、固有名詞の中で〔基本数詞+助数詞〕の意味を有して使用されている。

()，(二郎)，三郎，四郎，五郎，六郎，七郎，八郎，(九郎)，十郎，
〈太郎〉 〈次郎〉

「一郎」は『平家物語』の〈高野本〉〈竜大本〉〈延慶本〉^(注10)などにも見られない。これに代わって「太郎」が用いられているのは、〈天草版〉と同様である。

a 〈天草版〉

河原太郎，河原次郎というて，兄弟あったが，(267⑩)

b 『平家物語』

- i 宇野の七郎親治が子共、太郎有治…、(〈竜大本〉上280⑤)
- ii 逸見冠者義清、其子の太郎清光、(〈竜大本〉上280⑧)

- iii 安食の次郎重頼、其子の太郎重資、(〈竜大本〉上280⑦)
- iv 武田太郎信義 (〈高野本〉下146②)
- v 太田太郎頼基 (〈高野本〉下353⑮)
- vi 河辺太郎重直 (〈高野本〉上210⑨) その他 多数

「二郎」にあたる語は〈天草版〉ではローマ字で綴られている。そのため『天草版平家物語語彙用例総索引』では、すべて「次郎」と翻字した。が、『平家物語』の古写本では「二郎」も散見される。

- c i 一条次郎忠頼 (〈竜大本〉上280⑨)
- ii 熊谷次郎直実 (〈竜大本〉下193②)
- iii 土肥次郎実平 (〈竜大本〉下192⑯)
- iv 加賀見二郎遠光 (〈高野本〉上210⑩)
- v 多田二郎朝実 (〈高野本〉上210⑥)
- vi 宇野の七郎親治が子共、太郎有治・二郎清治、(〈竜大本〉上280⑤)

「九郎」は『平家物語』では源義経を指す固有名詞として用いることが多い。が、他に使われる例もある。

- d 信乃源氏井上ノ九郎光盛^(注11) (〈竜大本〉下430⑧)・〈高野本〉上367⑮)

e 〈天草版〉

金子の十郎 (333⑥) 三浦の十郎 (272①)

f 『平家物語』

金子の十郎家忠 (〈竜大本〉下193④)

三浦佐原十郎義連 (〈竜大本〉下193②)

g 〈天草版〉

i 安田の三郎 (254⑭) その他 154①

緒方の三郎 (379①)

ii 佐々木の四郎 (230⑪) その他 (230⑫)(232⑬)(237⑯)

人見の四郎 (274⑭)

h 『平家物語』

i 伊勢の三郎義盛 (〈竜大本〉下147①)

稲毛の三郎重成 (〈竜大本〉下146④)

ii 江戸の四郎重春 (〈竜大本〉下146⑥)

佐々木の四郎高綱 (〈竜大本〉下146⑭)

視点を変えて上記にあげた用例を全体的に見ると、〈天草版〉では人物呼称が〔姓＋名（三郎・四郎など）〕の構造になっている。そして、三郎・四郎などは三男・四男の意味を連想させるものの、〈名〉の範疇に入れるものとなろう。これに対して『平家物語』では、人物呼称に多くは〔姓＋数詞（三郎・四郎など）＋名〕の構造になっている。ここに両者の相違を見ることができる。

VI. 『吾妻鏡』『武家家伝』の用例との比較

『平家物語』諸本には「三郎」「四郎」などが、固有名詞の中で〔基本数詞＋助数詞〕の意味を有して使用されている。『吾妻鏡』もこれとほぼ同様である。

(), 二郎, 三郎, 四郎 五郎 六郎, 七郎, 八郎, 九郎, 十郎,
〈太郎〉 〈次郎〉

「一郎」は『吾妻鏡』にも見られない（第四の概略調査）。これに代わって「太郎」が用いられているのは、〈天草版〉や『平家物語』〈高野本〉とも同じである。

「二郎」は「次郎」と並んで多く使用されている。この点は『平家物語』〈高野本〉などと異なる。また「九郎」がすべて「九人目に生まれた男子」という意味で使用されている。このことが『平家物語』諸本と相違する点である。

a 太郎

- i 足立太郎左衛門尉直光
- ii 長井太郎

b ○二郎

- i 遠江二郎左衛門尉
- ii 伊賀二郎左衛門尉光房

○次郎

- iii 刑部次郎兵衛尉
- iv 出羽次郎左衛門尉行有 出羽次郎左衛門尉

c 九郎

- i 城九郎泰盛
- ii 大泉九郎長氏 大泉九郎

『吾妻鏡』からの用例の一部を示すと、次のようになる。上記の用例の中で、b-iv（出羽次郎左衛門尉行有,出羽次郎左衛門尉）とc-ii（大泉九郎長氏,大泉九郎）に特に注目したい。これらは同一の人物を〈名〉を記したり、削除したりしているからである。このような記述は『吾妻鏡』に散見されることである。

「武家家伝」などに見られる武士の呼称を調査し、整理すると、次のようになる。

- a 〈数詞〉と〈名〉との間に「左衛門」のような〈官職由来〉の語が入った例は多い。
 - i 近藤三郎左衛門尉宗光（「武家家伝」 近藤氏）
 - ii 近藤三郎左衛門正純（赤穂城跡本丸庭園）
 - iii 近藤四郎右衛門尉季常（「武家家伝」 近藤氏）
 - iv 近藤五郎右門衛門正次（「武家家伝」 近藤氏）
 - v 近藤六郎右衛門重頼（「武家家伝」 近藤氏、岩村城跡）
- b 上項のうち、〈名〉が省略された例も多い。
 - i 近藤四郎左衛門（「武家家伝」 近藤氏）（ほか多数）
 - ii 佐々木五郎左衛門（「武家家伝」 佐々木氏）（ほか多数）
- c a項から官職由来の語を除いた例も多い。
 - i 近藤六郎周家（「武家家伝」 近藤氏）
 - ii 加藤九郎景城（「武家家伝」 上野原加藤氏）
- d 「郎」を用いず、基本数詞を使う固有名詞も見られる。
 - i 近藤七国平（「武家家伝」 近藤氏）
 - ii 近藤八（「武家家伝」 近藤氏）

これらのうちで注意すべきは、「武家家伝」d項の「近藤七国平」「近藤八」である。「七」「八」は「七郎」「八郎」と同じ意味であろうか、調査を要する。『平家物語』〈高野本〉にも「坂西の近藤六親家」（下265①ほか2例）（阿波国板野郡坂西の住人）が登場する。〈名〉のない「近藤六」も同じ人物である。『吾妻鏡』では「近藤七親家」とある。すべて基本数詞を固有名詞の中に取り入れた表現である。

なお、〈天草版〉では「斎藤五」「斎藤六」（ともに186⑬）、『平家物語』〈高野本〉でも「斎藤五」「斎藤六」（ともに下45⑭）の例が存する。

VII. 数表現の入った人物呼称の構造

A 天草版『平家物語』

	〈姓〉	〈名〉 (数詞)	官職 由来	備考
A (i)	伊勢の 佐々木の	三郎 四郎		三郎丸 (三郎+Y) Yは〈接尾〉 四郎殿 (四郎+Y) 同上
A (ii)	湯浅の	七郎+兵衛=〈名〉		この例のみ

人物呼称の構造が〔姓+名〕を基本にして成り立っていると見た場合、「三郎」「四郎」は〈名〉の部分である。が、意味の上からは「三番目に生まれた男子」「四番目に生まれた男子」で、数表現を含んでいる。また、〈名〉の部分の「三郎」「四郎」は上表の備考として示したように、「三郎丸」「四郎殿」ともなる。親愛や尊敬の接尾語「丸」「殿」が付加されているが、これらもやはり数表現を含んだ人物呼称である。その他、「湯浅の七郎兵衛」「(湯浅の) 七郎兵衛」はこの作品では〈数詞〉に「兵衛」を接尾語のように付加して〈名〉にしたものであろう。なお参考のために上げると、『平家物語』〈斯道本〉には「湯浅の七郎兵衛宗光」(775⑤)とある。

B 『平家物語』諸本

	〈姓〉	〈数詞〉	〈官職 由来〉	〈名〉	備考
B (i)	伊勢の 佐々木の	三郎 四郎	—— ——	義盛 高綱	〈高〉下147① 〈高〉下146⑭
B (ii)	飛驒の 上総の	三郎 五郎	左衛門 兵衛	景経 忠光	〈高〉下251⑧ (三郎+Y) 〈高〉下251⑧ (五郎+Y)

『平家物語』諸本では武士の呼称の構造はB (i)〔姓+数詞+名〕を基本にしている。この場合の「三郎」「四郎」は意味の上からも構造の上からも〈数詞〉と考え、数表現を含んだ人物呼称としてよいであろう。B (ii)の例は少ない。「左衛門」「兵衛」は官職に由来しているものもあろう。が、〈数詞〉の後に接尾語のように付加したものもあるかと思われる。

C 「武家家伝」など

	〈姓〉	〈数詞〉	〈官職由来〉	〈名〉	備考
C (i)	伊東 近藤	六郎 九郎	—— ——	祐清 周家	『吾妻鏡』(建久4年1193) 「武家家伝」坂西氏 (平安末期に源義経に属す)
C (ii)	近藤 近藤	三郎 四郎	左衛門 右衛門の尉	正純 季常	赤穂城の設計築城 (寛文元年1661) 松前町の「館浜」の建築 (嘉吉元年1441)
C (iii)	近藤 近藤	九郎 九郎	左衛門 右衛門	—— ——	『寛永四侍帳』 『元和之侍帳』 (元和元年1624)

平安末期から江戸前期にかけての時代では『平家物語』と同じC (i) の構造が多く見られる。が、城の設計・築城をした者などは多くC (ii) のように官職も記している。その順序は〈数詞〉の次である。C (iii) はC (i) の構造から〈名〉を省略し、〈官職由来〉を添えたものである。『侍帳』に多く用いられている。

全体として「三郎」「四郎」などの〈数詞〉は〈姓〉の次に記されている。

D 近代(明治～昭和)の男子の呼称

参考のために、近代の男子の呼称として多数用いられているものを示してみよう。^(注12)

	〈姓〉	〈名〉 (数詞)	〈官職由来〉	〈名〉	備考
D (i)	近藤 近藤	三郎 四郎	—— ——	—— ——	(三郎+Y) 中島 三郎助 (四郎+Y) 川越 四郎殿 大山 四郎丸(地名に多い)

D (ii)	北里 松田	柴三郎 藤四郎	— —	— —	(三郎+Y) 岡田 三郎助
--------	----------	------------	--------	--------	---------------

D (i) は明治・大正期に多く用いられたとされるものである。「三郎」「四郎」は数詞としての意味を含むことであろう。が、主要な働きは〈名〉である。天草版『平家物語』では〈数詞〉が〈名〉へと変化する過程にあるものとして、〈名〉(数詞)としての項に入れて表示した。

D (ii) は昭和期に多く用いられるようになったものである。「三郎」「四郎」に漢字1字を冠して男子の名としている。〈数詞〉の意味も薄くなっており、〈名〉の項に入れるのが適当である。

VIII. むすび

本論では天草版『平家物語』における「伊勢の三郎」「佐々木の四郎」の「三郎」「四郎」のような、人名の中に入った数詞の構成と用例、およびそれを取り入れた人物呼称の構造と用法について、『平家物語』諸本や『吾妻鏡』などと比較して考察を試みた。その特徴を簡約して述べると、次のようになる。

(イ) 天草版『平家物語』・『平家物語』諸本などにおける「三郎」「四郎」などの語と構成

「三郎」「四郎」などの語を学校文法の視点から分類すると、一般的には名詞(数詞)ということになる。そして、「郎」は男子、特に年若い男子の意味である。が、「三郎」「四郎」という場合、基本数詞と複合して接尾語として働き、一家または一族の中での男子の生まれた順序をも表す。

さて、天草版『平家物語』では「三郎」「四郎」などが一般に特定の人物を指す語句の中で用いられている。それ故これは数表現を人物呼称の中に取り入れ、固有名詞の一部として、時にはそれだけで固有名詞として用いられていると言えよう。ただし、時にはそれだけで固有名詞として他の語と補い合って特定の人物を指す例もある。

これらの作品の中に取り入れられた「三郎」「四郎」などの語を表示すると、次のようになる。

表Ⅰ 天草版『平家物語』・平家物語〈高野本〉・『吾妻鏡』などの〔基本数詞+郎〕

A天草版 『平家物語』	〈太郎〉	〈次郎〉	三郎	四郎	五郎	六郎	七郎	八郎	()	十郎
B『平家物語』 〈高〉など	〈太郎〉	(二郎) 〈次郎〉	三郎	四郎	五郎	六郎	七郎	八郎	(九郎)	十郎
C『吾妻鏡』 など	〈太郎〉	二郎 〈次郎〉	三郎	四郎	五郎	六郎	七郎	八郎	九郎	十郎

天草版『平家物語』では「一郎」「二郎」がない。この2語は同じ意味で「太郎」「次郎」を用いる。また『平家物語』諸本で源義経を指す「九郎」は、その代りに「義経」などを用いている。

『平家物語』諸本も「一郎」「二郎」に代って、同じ意味で「太郎」「次郎」を用いている。ただし、「二郎」と記したものは少々存する。

『吾妻鏡』は『平家物語』と共通する部分が多い。「一郎」は見られず、「太郎」が用いられている。「二郎」は「次郎」と並んで多い。「九郎」も「三郎」「四郎」などと同じ数詞の意味で多く用いられている。

(ロ) 数表現の入った人物呼称の構造と用法

「三郎」「四郎」などの数詞が入っている人物呼称の構造は、『吾妻鏡』の用例を中心に整理すると、理解しやすい。大勢の人物が登場し、呼称の形式が比較的広範囲にわたって把握できるからである。

天草版『平家物語』・『平家物語』・『吾妻鏡』の3作品を資料にして人物呼称の構造を4種に分類すると、次のようになる。

表Ⅱ 天草版『平家物語』・『平家物語』諸本・『吾妻鏡』の人物呼称の構造

類型	〈姓〉	〈数詞〉	〈官職由来〉	〈名〉	備考

①	●	●	—	△	A (i) 伊勢の三郎
②	●	●	●	△	C (iii) 近藤九郎左衛門
③	●	●	—	●	B (ii) 佐々木の四郎高綱 C (ii) 伊藤九郎祐清
④	●	●	●	●	C (i) 近藤三郎左衛門正純

参考 ①型の中には〈数詞〉と〈官職由来〉とが結合し、〈名〉のように働くものも現れている。

これらを全体的に見ると、『平家物語』では③型B (ii)〔姓+数詞+名〕が基本になり、天草版では〈数詞〉が〈名〉に代って働く①型A (i)〔姓+名(数詞)〕が主流になる。そして、「武家家伝」などでは『平家物語』と同じ③型C (ii)の構造のものが多く見られる。が、④型C (i)〔姓+数詞+官職由来+名〕や、②型C (iii)〔姓+数詞+官職由来〕のような〈名〉の脱落した構造のものが現れるようになる。〈名〉が脱落して〈数詞〉や〔数詞+官職由来〕がそれに代わるのは、①型のAに通じ、近代の男子の呼称の「三郎」「四郎」にも通じる。これは近代の男子の呼称の中に〈数詞〉が入り込んだ根源を示す興味ある現象である。

注記

- (1) 「中世日本語の数詞の構造と用法に関する考察—— 天草版『平家物語』を中心に ——」近藤政美ほか 岐阜聖徳学園大学教育学部『教育実践科学研究センター紀要』第4号 2004。
- (2) 天草版『平家物語』(略称〈天草版〉・〈天〉) 影印・翻字は〈注3〉参照。天草学林の刊行。大英図書館蔵本が唯一の伝存本で序文に1592年の識語がある。原本および影印本による。
- (3) 『天草版平家物語語彙用例総索引』(4冊)第1冊が影印・翻字篇 近藤政美ほか編 勉誠出版 1999。
- (4) 『平家物語』〈高野本〉〈高〉とも 東京大学国語研究室蔵。影印は『高野本平家物語』笠間書院 1973。用例の所在は新日本古典文学大系『平家物語』〈新大系〉

梶原正昭・山下宏明校注 岩波書店 (上) 1991 (下) 1993。

- (5) 『吾妻鏡』 鎌倉時代後期成立の史書。鎌倉幕府の公的編纂で、わが国最初の武家の記録である。調査は第四、『新訂増補国史大系』による。吉川弘文館 1975。
- (6) はりまや「武家家伝」を参考にした。
- (7) 『日本国語大辞典』日本大辞典刊行会編 編集委員は市古貞次氏はじめ12名。小学館 1972。
- (8) 『平家物語』〈竜大本〉 竜谷大学付属図書館蔵。影印は龍谷大学善本叢書13『平家物語』(四冊) 思文閣出版 1993。日本古典文学大系『平家物語』〈旧大系〉(高木市之助ほか校注 岩波書店 (上) 1959 (下) 1960) による。
- (9) 『平家物語』〈斯道本〉 慶応義塾大学付属斯道文庫蔵。本文は巻四～巻七、巻九～巻十二の範囲で〈天草版〉の口訳原拠にきわめて近い。原本および影印による。影印は『百二十句本平家物語』汲古書院 1970。
- (10) 『平家物語』〈延慶本〉 大東急記念文庫蔵。影印は『延慶本平家物語』古典研究会 1964。
- (11) 井上ノ九郎光盛 信濃の国高井郡井上に住み、井上を姓とした。〈天草版〉ではこの部分は省略されている。
- (12) 『日本人名大辞典』上田正明ほか監修 講談社 2001。

付記 本稿の資料を調査するにあたり、岐阜聖徳学園大学の清田善樹氏(日本史学)から御助言を賜りました。厚く御礼申し上げます。

追記(初校時)

原稿提出後、『太平記』も本論のために有意義な資料になると考えた。そして、調査の結果を示し、第Ⅷ節(むすび)と比較することにした。

『太平記』は室町時代(応安の頃)に成立した軍記物語である。南北朝時代の騒乱を華麗な和漢混交文によって描き出している。土井本(注)から「三郎」「四郎」などの数表現を抜き出して整理すると、次のようになる。

類型 番号	① 姓+ 名(数詞)	② 姓+数詞 +官職由来 +○	③ 姓+数詞 +○+名	④ 姓+数詞 +官職由来+名
1	朝山太郎	金持太郎 左衛門尉	駿河太郎 重時	斉藤太郎 左衛門 利行

2	青木次郎	菊池次郎 左衛門尉	明智次郎 頼兼	南条次郎 左衛門 宗直
3	平賀三郎	葛西三郎 兵衛尉	江田三郎 光義	山城三郎 左衛門尉 行光
4	木村四郎	長崎四郎 左衛門	北条四郎 時政	相馬四郎 左衛門尉 忠重
5	那須五郎	綿貫五郎 左衛門 寺岡兵衛 五郎	里見五郎 義胤	大原五郎 大夫 範貞
6	畑六郎	佐々木六郎 左衛門	酒井六郎 貞信	畑六郎 左衛門尉 時能
7	武部七郎	結城七郎 左衛門尉	菊池七郎 武朝	齊藤七郎 入道 道猷
8	関屋八郎	三浦八郎 左衛門尉	野中八郎 貞国	伊東大和八郎 左衛門尉 祐熙
9	荒尾九郎	飽間九郎 左衛門	山本九郎 時綱	結城九郎 左衛門尉 親光
10	土岐十郎	齊藤十郎 兵衛	土岐十郎 頼貞	齊藤十郎 左衛門尉 利行

- A 天草版『平家物語』で主流になっているのは、①型である。が、「九郎」は「三郎」「四郎」と同じように〈名〉として用いられている。（「九郎」は〈天草版〉では「義経」などの語に言い換えられている。）
- B 『平家物語』諸本で主流になっているのは、③型である。が、「三郎」「四郎」は〈姓〉と〈名〉との間に〈数詞〉として用いられている。（「九郎」は『平家物語』諸本では一般に義経を指す語として用いられている。）
- C 「武家家伝」では、〈数詞〉の次に〈官職由来〉のある②型と④型が目される。が、③型も見られる。
- D 『太平記』では、第Ⅷ節（むすび）で『吾妻鏡』を主にして作成した表Ⅱの4種の類型がすべて用いられている。又、同一人物に二通り以上の呼称が用いられることもある。（例-①畑六郎・②畑六郎左衛門・④畑六郎左衛門時能）。（〈天草版〉では②型は例外と解するものしかない。③型・④型はない。）

（注記）

土井本『太平記』 土井忠生氏所蔵の古写本（江戸時代初期か）、流布本系統の平仮名書きの40冊完本である。『土井本太平記本文及び語彙索引』（西端幸雄ほか編、勉誠社、1997）を用いた。